金沢大学北溟寮における伝承寮歌をめぐる一考察・補遺:「南下軍の歌」の他校伝播及び”バンカラ唱法”の出現とその意味をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 團野, 光晴 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47777

金沢大学北溟寮における伝承寮歌をめぐる一考察・補遺

―「南下軍の歌」の他校伝播及び〝バンカラ唱法〟の出現とその意味をめぐって―

團野光晴

1　はじめに

『金沢大学資料館紀要』第一一号（二〇一六年三月）に発表した拙稿「金沢大学北溟寮における伝承寮歌をめぐる一考察　――戦後新制大学生精神史研究の試み――」は、金沢大学北溟寮の二〇一六年度末閉寮決定を受け、一九八六年から九二年にかけて在寮した筆者（團野）が当時伝承されていた六つの寮歌について考察し、戦後新制大学生精神史解明の一助とせんとしたものである。これは金沢大学国語国文学会二〇一五年度大会（二〇一五年一〇月三日、金沢大学サテライト・プラザ）で行った講演に基づくものだが、この講演は幸い好評を博し、活字化の機会をいただくと共に、金沢大学人文学類一年二〇一六年度前期前半「地域概論」第三回（二〇一六年四月二八日）の授業でほぼ同内容を講義させていただく運びにもなった。この講義に寄せられた学生諸君のレポートには熱気あふれる力作が多く、親子ほども年の離れた中年ＯＢの話に対する若者からの反響に、こちらの方が驚かされることとなった。また抜刷やネット公開で拙稿をご高覧下さった北溟ＯＢの方からも、ありがたい反響を数多くいただいた。この学生講義レポートとＯＢや一般の方から提供していただいた資料や証言の中には、北溟寮の寮歌にまつわる新たな知見をもたらしてくれたものがあったので、本論で報告し考察する。

ところで先の拙稿で北溟寮自治会執行部の任期を一年としていたが、筆者の一年先輩の北溟寮ＯＢ・小池広人氏から、任期は半年であるとご指摘を受けた（二〇一六年一〇月一五日電話）。筆者の記憶違いであり、ここに訂正する。また第三章二の三で「北溟寮の直接のルーツである北斗寮」と記載したが、北溟寮ＯＢの塩谷（しおや）憲司氏（一九六七年入寮、後述）より、北斗寮は北溟寮に吸収合併され閉寮となったのが事実で、「直接のルーツ」とすると北斗寮が北溟寮の前身であるように誤解を招きかねないとご指摘をいただいた（同一〇月二四日メール）。そこで「北溟寮に吸収合併された北斗寮」と改めさせていただく。また塩谷氏の在寮時には寮執行部役員の任期は一年ということであった（同一〇月二五日メール）。

さらに先の拙稿執筆に当たり貴重な情報とアドバイスをいただいた筆者の二年先輩の北溟寮OB・土田亮平氏のお名前を、先の拙稿では「良平」と誤記してしまっていた。この場を借りて訂正し、改めて土田氏にお詫び申し上げる。土田氏からはその後二〇一六年八月三〇日にメールで、同二八日に北溟寮を訪れた際、「北溟寮」と記した門の表札の隅に「雅義」と小さく記載されているのに改めて気づいたが、これはいかなる意味かと質問を受けた。私も土田氏から指摘されるまで全くこのことに気づかなかったが、添付されていた写真を見ると確かに「雅義」と書かれてある。そこで『金沢大学五十年史　通史編』（同編纂委員会、二〇〇一年八月）に当たったところ、北溟寮寮棟新築工事第一期完成時の金大学長が石橋雅義氏であることがわかった。従って「雅義」は表札の「北溟寮」の文字が石橋雅義氏の揮毫であることを示すものであろう。『五十年史』の「金沢大学関連年表」によると、石橋氏は一九六一年九月、前任の戸田正三・第一代学長の後を受けて第二代学長に就任、六七年三月三〇日の北溟寮第一期新築完成を見て同九月二一日退任し、中川善之助・第三代学長に交代した。同書所収の橋本哲哉「石橋雅義学長の横顔」によると、石橋氏は金大学長選出当時に京都大学名誉教授、京大では理学部で分析化学の講座を担当し、金大学長就任直前に日本学士院賞を受賞した。先代の戸田学長がエリート意識から地元に対して高踏的な姿勢をとったのに対し、石橋学長は地元との関係を重視し、施設と教官の充実を通じて新たな伝統を築こうとした。六二年四月二五日にライシャワー米駐日大使を金大に招待、ライシャワー氏は学生への講演で「歴史を理解しないで正しい社会批判はできない」「物質文明の進歩の中で歴史をみつめよう」と語り、六〇年安保闘争後の日米関係を考える上で記念すべきこととなった。因みに「北溟寮」の名前は『荘子』の「逍遙游」編の一節「北冥に魚有り、其の名を鯤と為す」に由来し、鯤が大魚であることから大物を輩出することを祈念して「北溟寮」と名付けたと、学生時代に教養課程の漢文の先生からうかがった記憶が筆者にある。「冥」は「溟」と同じく「暗い海」の意味があり、「冥土」に通じる「冥」の字を避けて「北溟寮」としたものと思われる。

2　「南下軍の歌」の他校伝播

さて先述の「地域概論」講義を聴講した一学生の方のレポートに、自分の母校である新潟高校では「南下軍の歌」が「応援歌D」として歌われていたが、「南下軍の歌」は広く出回った歌なのか、それとも新潟高校の前身である旧制新潟中学と四高との間に何か結びつきがあったのか、という旨の質問があった。そこで新潟県立新潟高等学校「青山同窓会」ホームページ[1]を見たところ「応援歌D」が掲載されており、これは「南下軍の歌」の二番までの歌詞を、「遂に南下の時到る」という部分を「遂に奮起の時到る」と変更して他はそのまま踏襲し、三番以下を削除したものであった。新潟高校青山同窓会事務局にメールで事情を問い合わせたところ、いつ誰によって「南下軍の歌」が新潟高校に伝えられたか正確なところは不明だが、旧制新潟中学に在校していた上村光司（かみむら）氏によると、氏の在校中の昭和一〇年代には既に「南下軍の歌」が新潟中学で応援歌として歌われ

ており、「旧制高校（大学）に進学した者が、それぞれの進学先の寮歌を拝借し、運動部の後輩に教えたのが定着したのではないか」と上村氏はお考えであるとのことだった。[2] 上村氏は昭和一八年三月に旧制新潟中学を卒業、新潟日報社で社長を務められた青山同窓会元会長である。後に筆者が青山同窓会事務局に送付した先の拙稿の抜刷をご高覧下さり、丁寧なお手紙をいただいた。[3] これによると氏は御年九一歳、新潟中学から旧制第一高等学校へ進まれたが、既に戦時下で旧制高校も三年制から二年制となり、授業を受けたのは初年の一年間だけ、残りの一年間は専ら勤労動員で工場での軍需品製作に当たっていたとのことである。また新潟でも「寮歌祭」を開催してきたが、年々鬼籍に入る方が増えて今年（二〇一六年七月一八日）は付き添いを含め七〇名の参加、うち四高卒業生は五名の参加で「南下軍の歌」と「北の都に秋たけて」を歌ったが、今回を以て寮歌祭は三七年の幕を閉じることになったということだった。さらに氏が進学された一高では明治三四年に全寮制が実現したのを機に毎年春の紀念祭にあわせ昭和二四年まで生徒作詞作曲の寮歌が制作され、卒業生からの寄贈歌を含め計三一七曲が存在すること、「南下軍の歌」は新潟中学ではよく歌われ、四高へ進学した者も多かったようなのでその者たちが持ち帰ったのであろうこと、昔は早慶はじめ有名校の応援歌を借りることも多く、新潟中学ではオペラ「カルメン」の「闘牛士」のメロディーの応援歌も存在したこと、一高では北溟寮のような〝バンカラ唱法〟はなかったが、両手を横に開き身体の前で打ち合わせながら寮歌を歌い、「嗚呼玉杯に花うけて」などは時により大スローテンポで歌われたことが述べられ、旧制中学・高校の応援歌・寮歌にまつわる貴重な証言となっていた。後にお電話を差し上げた際、[4] 戦争末期には召集を受け、相模湾からの米軍上陸に備えて神奈川県に配備されたが、遂に戦闘に至らぬまま終戦になったともうかがった。思いがけず久し振りに戦争を直接体験された方の証言に接し、戦後七一年目の夏の貴重な体験となった。

新潟高校（旧制新潟中学）とは別に、「南下軍の歌」のメロディーのみが他校に伝わったケースとして、秋田県立能代高等学校の例がある。能代高校東京同窓会ホームページの「校歌・応援歌」の項の工藤茂宣氏「『わが校の応援歌の出自』に対してのご教示」[5] には、能代高校の前身・旧制能代中学第一〇期生（昭和一四年卒）の久喜健男氏からの手紙に、昭和一三年五月に作成された能代中応援歌「戦わん哉」は久喜氏ら能代中第一〇期生有志が作詞した歌詞に「南下軍の歌」のメロディーをつけたものであること、野球部監督の平川民治が四高出身で、野球部では「南下軍の歌」を練習終了後に円陣を組んで歌っていたが、このメロディーで「戦わん哉」の歌詞を歌ってもらったところ「豪勇にして悲壮で心魂ともに揺さぶられ、衆議一決した」とあったと報告されている。また久喜氏は手紙で、能代中を卒業後、ラジオの寮歌特集で「南下軍の歌」を聴いたことがあるが、その時、元歌は「戦わん哉」と多少違うなと感じたと述べていたということである。さらに平川民治の子息・長氏からの手紙には、民治が四高野球部員として「昭和五年に甲子園で優勝」し、四高野球部時代に能代中学に初めて野球部コーチに来たとあったことが述べられているとのことであった。因みにこの「甲子園」とは全国高専野球大会のことで、現在の高校野球とは別物である。作道好男・

江藤武人編『北の都に秋たけて　四高史』（財界評論新社　一九七二年一〇月）四四四頁掲載の昭和五年度高専大会決勝の対横浜高等工業学校戦のメンバー表に、ファーストとピッチャー兼任として平川の名がある。明記されてはいないが工藤氏の記述から推察すると、平川民治は能代中から四高に進学し、四高野球部時代にOBとして能代中野球部にコーチに来て、その後能代中教員となり野球部監督に就任した模様である。また工藤氏の記述からは、戦前の段階で「南下軍の歌」がラジオで流されることがあり、従ってレコード化もされて一般に流布していたらしいこともうかがわれる。能代高校東京同窓会ホームページでは「戦わん哉」のメロディーも公開されており、やや変形されてはいるが確かに原曲は「南下軍の歌」と確認できる。

多くの旧制高校・大学の歌が一般に流布する中、他校の寮歌・応援歌のメロディーにオリジナルの歌詞をつけて自校の応援歌とするケースはかなりあったようで、「五誓寮逍遙歌」の作曲者・西田重治が石川県立羽咋高等学校教員時代に発表した論文「応援歌によせて」[6]にも次のような記述が見られる。

本校で最近歌われている応援歌を拾つて見よう。「白雪なびく」は佳曲には違いないが、曲自身は旧一高寮歌「あゝ玉杯に花うけて」のものそのまゝである。「春倫安」は旧三高のもの「紅もゆる丘の花」の曲に詞を附したものである。（中略）「金沢城韻」「羽松ヶ御空」は何れも軍歌の曲にそのまゝ作詞したものである。以上の所では作詞こそ本校独自のものであろうが曲はと言うと殆んどが、所謂借り物である。「朝日に匂う」もこの例にもれず、早稲田大学校歌そのものであるが、原曲から見るとかなり変化している為もあり、曲と詞とがマツチしていない為もあるのか、早大学生が歌う時の様な迫力も何も感ぜられない。（中略）数々の応援歌の曲そのものの中には、恐らくは嘗ての高校生が常々口ずさんでいたものが多いであろうから、多感な青年の心を把え得るものも多かろう。従つてそれ等の曲を歌うことに私は何等の異議もないのであるが、たゞ「之が羽高応援歌ぞ」と満天下の観衆を前にして絶叫するには、他校のものの借り物では些か面映ゆい感じがしないだろうか、余人は知らず。

また先の拙稿でも取り上げた鴨谷潤「四高への郷愁を断絶せよ」（北斗寮機関誌『北斗』第三号、一九六七年四月所収。鈴木利郎氏蔵）には、「戦後二十二年、新制大学発足以来十八年の歳月が流れた今もなお大学校歌を歌う前に旧制高校寮歌を歌う土地があるとすればまことに因習深い町であろう。それが金沢なのである」「南下軍の歌が中学校の応援歌になり羽織袴の四高さんが飛び出したのでは金大生の専売でもなくなった」とあり、一九六〇年代後半の金沢で四高の寮歌が一般に流布し、特に「南下軍の歌」は中学校の応援歌にも採用されるようになったことがわかる。六〇年代ぐらいまで、旧制高校や大学の歌で有名なものは、当該校在校生や卒業生以外にも広く愛好されたようである。

ただ、「南下軍の歌」は元来四高の歌であり、これを他校が自校の応援歌としてそのまま歌うことは、四高存続中及び廃止後間もない頃では一般には抵抗があったのではないか。西田重治の論文でも、

一九五三年当時の羽咋高校応援歌は旧制一高・三高・早稲田の歌のメロディーを借りたものだが、歌詞はオリジナルである。やはり旧制高校廃止から三年という段階では、旧制高校の歌をそのまま自校の歌とすることは思いもよらなかったのだろう。また工藤茂宣氏報告の能代高校のケースも、「南下軍の歌」は「野球部の練習が終わると円陣になって合唱していた」ということであり、平川監督の母校の歌として野球部で内々に歌っていたらしく、対校試合で能代中の応援歌として公式に歌うことはなかったのではないか。能代中応援歌は「戦わん哉」としてメロディーを「南下軍の歌」から借りつつ歌詞を独自に作るのである。更に鴨谷潤も、論文発表時の一九六七年の段階で「南下軍の歌」が金沢の中学校でも応援歌として歌われ金大の専売特許でなくなったと述べているのである。四高廃止から充分時間が経ち、旧制高校が伝説化された時点ではじめて、「南下軍の歌」も中学校でそのまま自校応援歌として歌えるようになったのではないか。

従って、四高がまだ存在していた時期に「南下軍の歌」二番までをほぼそのまま自校の応援歌とした新潟高校（旧制新潟中学）のケースは、かなりユニークなものと言えそうである。上村氏が言うように、能代中学のケースと同じく、新潟中卒業後四高に進んだＯＢが運動部コーチまたは教員などの形で新潟中に戻った際に伝えたものであろう。三番以下をカットし二番の末尾を変更することで四高南下軍のイメージを払拭しつつ、四高と共有する日本海側の風土を歌った歌詞を活かして新潟中の応援歌に仕立てる巧みな本歌取りには、四高を兄貴分と見なして慕う新潟中生の心と、四高へ進んだ自分に続けと後輩たちを励ます新潟中ＯＢの心との交感が感じられる。そこには、日本海側唯一のナンバースクールである四高をシンボルとして、風土を共有する者同士が熱く手を握り合う、「日本海主義」とでも言うべき反骨の思想が存在するようにも思われるのである。

3　〝バンカラ唱法〟の出現とその意味

先の拙稿でも述べたが、筆者在寮中の北溟寮では、六つの寮歌をオリジナルよりもテンポを大幅に引き伸ばし、体をのけぞらせ全身を使って大声で歌う応援団風〝バンカラ唱法〟とでも言うべき歌唱法で歌っていた。先の拙稿ではこの歌唱法の起源については明らかにし尽くすことができなかったが、北斗寮ＯＢの鈴木利郎氏（一九六三～六七年在寮）の証言から、北斗寮が北溟寮に吸収合併された一九六七年の段階では寮歌は普通の歌い方で歌われていたことが判明し、〝バンカラ唱法〟は七〇年代以降に成立した比較的新しいものなのではないかという見通しを立てることができた。その後北溟寮ＯＢの高屋秀行氏（八〇年入寮）に〝バンカラ唱法〟についてうかがったところ、同じく八〇年入寮の山田篤氏・長島勉氏の談話を紹介していただき、三氏入寮時には既に〝バンカラ唱法〟が確立していたことが判明した。更にこの後、北溟寮ＯＢの塩谷憲司氏（六七～七一年在寮）、和田健夫氏（七〇年入寮）、小原（こはら）裕一氏（七五年入寮）から証言を得、〝バンカラ唱法〟出現の時期とその思想的意義がかなり明らかになってきたと思われるので、以下述べてみたい。

まず塩谷憲司氏からは二〇一六年九月二二日にメールをいただき、

同二四日に電話でお話をうかがった。これらを再度氏自身がまとめなおされた同一〇月一二及び一四日のメールによると、塩谷氏は長野県松本深志高校を六七年に卒業、金大法文学部法学科入学と同時に当時まだ木造であった北溟寮に入った。入寮時には「歌唱指導を受け、自衛隊までストームをかけたり各種宴会で洗礼を受け」たという。新寮に引っ越しても「旧寮と同じように歌唱指導が行われた」とのこと。当時北溟寮では既に六つの寮歌が存在し、原曲通りの正調のテンポで歌われていた。氏によれば「五誓寮逍遙歌」は旧北溟寮でも、前身校・金沢高師の歌として北斗寮との合併前から歌っていたそうである。「旧北溟寮入寮時の寮歌指導は先輩から怒鳴られるなど厳しい面もあったが、この類のことは高校で慣れていたので抵抗はなく、むしろこれで大学生になったと嬉しく思った」とのこと。氏の出身校の松本深志高校は、旧制松本中学以来のバンカラな気風を受け継ぎ、全校生徒で応援団を結成して旧制高校寮歌・逍遙歌・記念祭歌・応援歌・青春の歌等を歌い伝え、一週間余り授業無しの自主自立の文化祭で青春の火を燃やすという自治活動が盛んであったので、旧北溟寮における伝統的な寮歌指導や寮自治会活動は自然と受けいれることができたとのことである。

また氏によれば、「六七年新北溟寮への引っ越し当初は、暫定的に旧北溟寮の執行部が寮歌指導はじめ寮自治会活動を取り仕切っていたが、年度途中に五〇名規模の北斗寮生が合流したので、その後、私が専門課程へ進級後の二回生後期に新北溟寮第一期自治会役員選挙が実施されました。旧北溟寮生と新入寮生含めて二百人近い寮友を基盤に、私達『全寮連支持者会議』候補者全員が、北斗寮系の対立候補者に圧勝し、私が執行委員長＝寮長に就任しましたが、入寮してきた北斗寮生の多くが、寮自治会執行部に対立していた。全国的な「学園紛争」の波の中で、学内では暴力行為も多々見られたが、生活の場である寮ではゲバルトは一切なかった。その他にも各種の党派に属する寮生や、無党派層も含め種々多様な政治的立場の寮生が生活していたが、それでも寮自治が可能だったのは、立場を超えて寮生を団結させた寮歌の力があってのことであり、寮歌の継承がなければ寮自治会活動などは、廃寮を迎える今日迄、半世紀も続かず、とうの昔に崩壊し消滅していただろう」とのことであった。氏は更に「私個人としても、時は七〇年安保改定をめぐる政治的昂揚の時代、入学後の教養課程在籍中に、城内のサークル活動を通して民主青年同盟に加盟し、急速に政治的自覚が高まる中で、二回生ともなれば、正に時の潮を肌で感じながら、歌詞の意味を捉え返して、旧制高校文化なるものの継承に止まらず、団塊の世代なりに時代の流れを反映する現代的意味を付加して、新しい社会変革の先駆けの自負をもって、自分達の生きる道を鼓舞する寮歌として愛唱するようになった。恐らく旧北溟寮を担って来られた諸先輩も、新寮で自治会活動に参加してきた後輩諸氏も同じような現代的意味づけを付加しながら自らの精神を鼓舞する寮歌として愛唱してきたのではないかと思われます。二回生以降は寮自治会活動を通して、文字通り『我ら自由の雄叫びは、時の潮に併する』という社会的政治的環境の中で、新北溟寮で情熱の庭を培えしていたのではないかと半世紀前を思い起こします」と、当時の状況を回想された。

学生運動が盛んだった六〇年代後半の雰囲気をよく伝える塩谷氏

の証言から感じられるのは、この頃の北溟寮伝承寮歌が、当時の新制大学と高校にまだ残っていた旧制高校文化の伝統を受け継ぎ、学徒としての「知性と教養」への自負に基づく「超然」「自由と自治」の精神を呼び覚まして、寮生の間に党派や思想信条の違いを超えた団結を形成しているさまである。当時の寮歌が四高以来の伝統を忠実に受け継いで正調で（格調高く？）歌われていたことは、その反映であろう。加えてそこに、戦後の新制大学自治寮としてスタートした北溟寮の「北溟寮寮歌」に脈打つ、自由と平和・民主主義の理念、社会変革をリードせんとする戦後学生気質が息づいているのである。

次に和田健夫氏からの手紙（二〇一六年七月六日付）によると、和田氏は法文学部法学科入学の七〇年から七七年まで、学部五年・院二年の計七年間北溟寮に在寮したが、当時も六つの寮歌は正調で歌われていたという。氏は自身の入寮時について、「新入生をすぐに部屋には入れず、大部屋に閉じ込めて、「新入生歓迎」・「歌唱指導」と称して、二年生が中心となって、寮歌を教え」、「覚えるまで何日も続くのですが、学生紛争の火種が残っていた当時のことですから、新入生が、封建的な？　やり方に忽ち反発し、二年生との間で夜を徹しての大議論になりました。結局は、新入生も納得して、歌唱指導は続けられ、最後は仲良く握手して部屋に入りました。懐かしい思い出です」と述べていた。ところで和田氏と在寮時期が重なる塩谷氏の認識では、新入寮生をまず居室に割り振った後、大部屋に集合させて寮歌指導を行っていたということで、新入寮生を居室割り当てに先立って大部屋に収容したということはなく、「和田氏の在寮期間が長かったのでその間にそうなっていた可能性はあり得ます」（二〇一六年一〇月二四日メール）とのことだった。筆者（團野）の頃は入寮初日の新入寮生を「合宿」と称して先ず一階から四階の各階に設けられた共有スペースである和室に割り振り雑魚寝させ、二日目から四日目にかけて「寮歌紹介」、四日目の晩から五日目の朝にかけ寮から内灘海岸往復など三〇キロあまりのコースを徹夜で歩く「歩く会」、五日目に新歓コンパ、六日目の晩に部屋決めのくじ引きが行われ、同室の先輩に連れられて和室から各居室に移動、ここまでの間で二・三度寮生全員が集まり一人一人大声で自己紹介する機会があり、翌七日目が大体例年四月一〇日頃になる入学式への出席、その後四月中は二回生の指導で寮歌練習、犀川河川敷での「夜桜コンパ」、寮生活にも慣れ始めた四月下旬に「活入れマラソン」、連休前に寮歌練習終了となって新歓期間を打ち上げたと記憶している。このように時々でやり方は異なるが、寮歌紹介・指導を中心とした新入りへの「洗礼」としての新歓祭の性格は、塩谷氏・和田氏・筆者の世代に共通するものである。反面、和田氏入寮の段階まで、寮歌は正調で歌われていたのである。

ただしここで注目されるのは、和田氏入寮時に新入生が寮歌指導を「封建的」と見なして反発する事態が生じ、氏がこれを「学生紛争の火種」の名残と認識していることである。ここに感じられるのは、北溟寮の寮歌とその指導を、高校時代に経験した旧制高校文化と同じものとして自然に受け入れた塩谷氏と、これを「封建的」として拒絶した和田氏世代との間にギャップが存することである。それと同時に戦後の学生運動が、塩谷氏においては多くの学徒が否応なく戦争に巻き込まれていった第二次大戦への反省を踏まえた、戦

争と全体主義に反対し平和と民主主義を実現する社会変革運動とイメージされているのに対し、和田氏においては集団からの自由を求める個人主義につながるものとイメージされているように見えるのである。和田氏の世代は最終的に話し合いによって先行世代の寮歌指導を受け入れ、旧制高校文化を戦後の学生運動の文脈に繋いだ北溟寮の自治体制は維持されることになった。しかしこの和田氏世代の〝民主的〟感覚の延長線上には、私生活中心主義による寮のアパート化が控えていたはずである。事実、七〇年代も終盤になった一九七九年一一月一八日付「北国新聞」は、特集記事「交錯の世代 石川の青春像 学生寮」で次のように記す。

小ぎれいなアパートやマンションで学生生活をエンジョイする若者が増えている中で、今なお伝統の気風や仲間意識が残る学生寮に入り、バンカラ風青春をおう歌する大学生がいる。／石川県内でも歴史の古い学生寮の一つ、金沢市野町五丁目の金大泉学寮。現在の入寮者は百五十八人。昭和四十年に鉄筋コンクリートに改築された「新寮」だが、寮の気風だけは受け継がれてきた。／（中略）ところで、この寮では新入の一年生は、入学式直後に行われる「歌唱指導」でバンカラの洗礼を受ける。旧制高校時代の寮歌が主だが、上級生から「元気がない」などとどなられ、高校生気分が抜けない新入生は「とんだ所へ入ってきた」と心細くなるのが普通だという。そして数ヵ月。夏が過ぎる頃にはもう仲間ができ、寮の生活に慣れてしまう。／（中略）とはいえ、安い生活費、強い仲間意識などが魅力のバンカラ風青春をおう歌する学生が年々減っていることも否めない。金大の場合、北溟、泉学、白梅（女子寮）の三寮とも数年前から空き室が目立つようになった。入寮希望者が定員に達しないわけで、現在北溟は二百九十二人（定員三百九十六人）泉学百五十八人（同百九十四人）白梅百三十人（同百六十四人）。学生部の担当者は「今の学生はアルバイトで相当の収入があって、好きな所に住める。それに子供の時から個室を与えられているので集団の生活を敬遠するのでは」とその背景を分析する。／一時は苦学生の〝生活の場〟だった寮も〝良家〟の子女が住むなど性格、内容は徐々に変わりつつある。

これは主に泉学寮に取材した記事だが、北溟を含め金大三寮をまとめて「バンカラ」とする認識が見られる。同記事に添えられた木村久吉金大助教授の談話は、「学生運動が世界的に激しかった昭和四十年代前半、金沢大学も同じような厳しい状態を免れなかった」「金沢大学の三寮は、たしか民青（民主青年同盟）の牙城といわれていた。私が学寮委員（昭和四十八年以降）になってからもよく学生が訪ねてきては議論をした」としつつ、現在の寮について「ある学生は寥々（りょうりょう）たる今を「アパートと変わらんね」と皮肉っていた」と述べる。総じてこの記事は、一時期学生運動の拠点となり活況を呈した金大三寮が、今は四高以来のバンカラの伝統を残しながらも次第にアパート化しつつあるとするもので、金大三寮に対する当時の一般的認識と言ってよいだろう。そこにはまた、高度経済成長がもたらした都市化・消費社会化が、旧制高校文化を次第に時代遅れのものにしていくと同時に、社会変革を目指す学生運動に結集した

戦後大学生のエネルギーを消費文化に拡散させ、学生を大衆としてアトム化していく様も見られよう。それは既に本論冒頭で触れたライシャワー米駐日大使金大来訪に予言されていたこととも言える。

しかし実際の北溟寮では、これとは傾向を異にする事態も七〇年代中盤頃に生じていた。それを示すのが、七五年入寮（工学部）の小原裕一氏の証言である。二〇一六年八月一二日のメールで、氏は在寮当時に寮の様子を記録した手記を示された。一部を紹介する。

入学式の時に校歌を聞いた。／「天うつ波～！　煙らい、天そそる～、、」／でもそれは、寮で叩き込まれたものとは、まったく違うものだった。／そう、「演歌」と「フルオーケストラで演奏するクラシック」の違いであった。／どうして親の反対を押し切って寮を選んだのか、、。／高校のときに自分の「なよっ」としたところが嫌だったのである。／いわゆる「ばんから」、「硬派」というものに憧れ、／それはもう寮にしか残っていないと考えたのである。／しかし、現実は「ばんから」というよりは「野蛮」そのものであった。／歌唱指導の五日間にも、退寮者が続出した。／それくらい、連中（先輩）は強烈だった。／およそ学生には見えない。／その後、「花の応援団」という漫画がはやった。／これは彼らのバイブルとなった。／「青田赤道」のような面々がうようよしていたのである。

思い出すが、確かにどおくまんプロの漫画『嗚呼!!　花の応援団』（「週刊漫画アクション」一九七五年一〇月一六日号～七九年五月二四日号）は、七〇年代後半に筆者が小学生だった頃、一大ブームを巻き起こしていたのだった。青年漫画であるから子供たちは読まなかったが、主人公の南河内大学応援団三回生親衛隊長・青田赤道の名は誰でも知っており、彼が発する「クエックエッ」「チョンワチョンワ」という奇声をよく真似したものである。小原氏のメール拝受後入手したアクションコミックス版（双葉社、全一五巻。一九七六年五月～七九年七月）の第一巻は七六年五月一日初版、同年一一月三〇日一八三版となっており、爆発的に売れたことがわかる。しかしこの度初めて読んだその作品世界は、コンプライアンスに厳しい今日では考えられないような滅茶苦茶が応援団の強烈な上下関係を唯一のモラルとして展開するもので、これを一読した加藤周一が「およそ人間のなりうる最も下等な状態」と評したという、ネット上に出回る出典不明の情報[8]もむべなるかなと思われるほどである。このアナーキーな応援団の世界を驚異的な身体能力と超弩級の下品さで暴れまくる青田赤道の怪物ぶりは、「猛爆ギャグ」のコピーそのまま一般常識を吹っ飛ばしてしまう。その青田赤道のような面々が実際にうようよしていたというのだから大変な話で、これに比べれば筆者世代など相当軟弱になっていたと言わざるを得ない。

なお二〇一六年一〇月二九・三〇日に電話で小原氏に確認したところ、氏の歌うテンポは「五誓寮逍遙歌」は筆者と同じ、「南下軍の歌」は筆者より速いが正調よりは遅く、「北溟寮寮歌」は筆者より速く、その他はほぼ正調通りだった。また同一一月五日に北溟寮で行われた閉寮記念同窓会「金沢大学北溟寮卒寮祭　2016　ほんとうにさようなら」で披露された小原氏ら七〇年代後半在寮者を中心とす

るOBによる「南下軍の歌」は正調よりやや遅い程度、アクションもほぼ右手を振るのみで、筆者ら八〇年代OBのテンポの遅さ及びオーバーアクションと際立った対照を見せた。さらにここで小原氏世代OBのお一人が披露した「五誓寮逍遙歌」は、筆者世代よりもややテンポが速いが筆者世代とほぼ同じで、もともとテンポの遅い歌だったようである。[9] その意味で小原氏世代の寮歌は六〇年代の塩谷氏世代の寮歌の形をよく残すものだろう。しかし、指導に異議を唱えた新入寮生と指導する上回生が話し合って双方納得の上寮歌指導が続行された和田氏入寮時と比べ、小原氏の受けた寮歌指導が『嗚呼!! 花の応援団』的な苛烈なものに変質して来ていることは明らかである。恐らくこの頃、既に卒寮または上回生として寮内活動の一線から退いた和田氏の世代と、小原氏を指導したいわば〝バンカラ〟世代との間で寮歌に対する意識にギャップが生じ、〝バンカラ唱法〟化が兆していた。そして八〇年入寮の高屋・山田・長島各氏の世代では〝バンカラ唱法〟は確立していたので、その成立は高屋氏世代入寮直前の七〇年代末頃とかなり遅いことが推定される。とにかく大声を出すことを追求するあまり、誰知らずいつの間にか全身を使ってスローテンポで歌うようになっていったというのが実態であるようだ。これが「猛爆」かつ「ギャグ」、すなわち真剣にバカをやるという『嗚呼!! 花の応援団』の精神の肉体的表現であることは、歌っていた筆者自身、事実を知って深く得心するところである。

『嗚呼!! 花の応援団』の精神とは、換言すれば体力と根性に基づく反知性主義である。これは、南河大応援団OB・剛田満が卒団式席上で咆える「アホウになるっちゅうことはそうざらにできるもんやないでえーっ」「すじがね入りのアホウになってほしいもんや」という台詞（第五九話）に端的に現れている。この漫画の連載当時、金坂健二は「可能性は低位文化にある」と副題に掲げる文章で、「大衆をがんじがらめにして無力化してきた——なかんずく〝他人と同じでなければならぬ〟という戒律——に一瞬もガマンできない人々」として青田を評価し、「ここではあらゆる権威が、文化の権威でさえも、無効なのだ」と喝破した。[10] 実際、それら応援団員たちが「一人残らず「知性と教養」からは完全に独立しているおかしさときたら、こらえきれるものではない」（荻昌弘）[11] のだが、そのグロテスクで暴力的な滑稽さは、堕ちるところまで堕ち切った時、荒れ野で叫ぶ者の如く、常識を覆す感動的な悲壮美を発揮する。たった一人残された応援団員としてその時代錯誤を嗤われながら、最後にはその壮絶かつ見事な応援ぶりで人々を総立ちにさせエールの大合唱に巻き込む杉浦大学応援団・山田直人（第八二話）は、その典型である。

『嗚呼!! 花の応援団』で描かれるのは、「学ラン」など旧制高校文化の形式の極端かつフェティッシュな誇張によってその内実である「知性と教養」を空洞化してエスタブリッシュメントを笑い飛ばし、そのことで腰の引けるところのない本気を解放する過激なナンセンスとしての七〇年代不良学生文化だと言える。「（注・昭和）五十一年から週刊漫画誌に連載されている「嗚呼!!（ママ） 花の応援団」（どおくまんプロ制作）は、主役の応援団の徹底した暴力ぶりが若者の間で絶大な人気となり、映画にもされた。話はあくまでも漫画の上でのことだが、漫画ブームの世相を反映してか、〝長ラン〟（すその長い学生服）にあこがれて「花の応援団」以後各高校、大学の応援団に

は入部希望者が急増しているという」（「北国新聞」一九七八年五月一一日夕刊）との報道にもあるように、その反知性的不良文化は当時多くの若者の支持を得ていた。北溟寮の〝バンカラ唱法〟も、この時代の文脈に位置づけられる。それは堕ちるところまで堕ち切るという形での「超然」であり、坂口安吾の「堕落論」が大学生の間で注目を集めるなど（例えば七六年一月発行の講談社現代新書・兵藤正之助『坂口安吾』が冒頭でこれに言及している）、あらゆるものをラディカルに疑い否定することで、己を縛る高度成長後の〝一億総中流〟の常識を打破して本当の自分を掴みたいとする、この時代の若者の苛立ちに根ざしたものと言えよう。

この〝バンカラ唱法〟の萌芽から確立に至る時期は、北溟寮精神史上の大きな曲がり角だったと言える。「知性と教養」に基づく「超然」「自由と自治」を原理とする旧制高校文化は、大衆消費社会化の中で急速にリアリティを失っていった。そのため四高以来の伝統を受け継いだ正調の寮歌は〝バンカラ唱法〟の寮歌に取って代わられ、その過激なナンセンスとしての肉体的苦痛によって、寮歌はようやくリアリティを保ち得たのである。ここに、北溟寮における旧制高校文化の正統な伝統は途絶えた。同時に〝バンカラ唱法〟は、寮のアパート化を招く私生活中心主義を打破するものでもあった。寮生を等しく肉体的苦痛の極限に追い込む〝バンカラ唱法〟は、その根底的な理不尽さによって既成道徳を無効化し、世間的虚飾を取り払われた真の己の姿に寮生一人一人を立ち返らせる。この自分が丸出しになる限界状況において、胸襟を開いた男どうしの固い絆が生まれ、寮自治の基盤となる北溟寮生としての鉄の団結と誇りが形成された。そこで寮生たちは、〝バンカラ唱法〟によって本気を出し磨き合い己を鍛え、経験したことのない自由を得たのである。マイホーム主義的な私生活中心道徳を超えられない者は、自ずとその場を去って行った。それはそれで一つのあり方で、むしろそのほうが常識的ですらあっただろう。しかし、微温的一般常識に護られて「なよっ」となってしまった己を鍛え直したいと、「親の反対を押し切って寮を選んだ」小原氏のような人もいたのである。そういう寮生が存在したことは、筆者世代でも同じであった。筆者自身は経済的事情から否応なく入寮せざるを得なかったに過ぎないが、図らずも素晴らしい仲間たちと出会って生涯の友情を結び、高屋秀行氏の言う「生きるしぶとさ」[12]を学んだことは、望外の喜びであった。このような熱い友情で結ばれた裸の魂が発する自由の雄叫びとしての〝バンカラ唱法〟の寮歌こそ、その後の北溟寮の基調をなしたものだった。

そしてこの〝バンカラ唱法〟が四高の伝統の正統を崩壊させたことで、寮歌は八〇年代ポストモダニズムの文脈において内実を組み替えられ、先の拙稿で述べた筆者世代の四高神話を新たに立ち上げてくることになったと言える。筆者の世代は、旧制高校の「知性と教養」も、戦後大学生の社会変革への自覚も受け継がなかった。そして入寮時に先輩から聞いたところによると、筆者入寮の二年前に寮歌指導は苛烈さがかなり緩和されたのであり、結局私たちは〝バンカラ唱法〟は受け継いだが、肉体的苦痛を極限まで追求して常識を打破せんとしたナンセンスの過激さまでは受け継ぎ切れなかった。つまりは「すじがね入りのアホウ」になれず〝バンカラ唱法〟に意味を求め、寮歌の歌詞に触発される形で、無意識裡に超歴史的な四

高神話を紡いだことになる。そのセンスは九〇年代のおたく文化の予兆と言えようか。従って先輩たちに比べれば、筆者世代は明らかに文弱であった。しかしそれでもなお私たちは観念的にであれ「超然」と自由たらんとし、他の何物にも代え難い貴重な経験を得たのである。未熟なりに筆者世代も、先輩たちから歌い継がれて来た寮歌の「超然」「自由と自治」の精神に、しっかり抱きとめられていたのだった。

4　終わりに

以上の考察から浮かび上がるのは、時空や思想信条の違いを超えて人を結びつけ、一人一人を支える歌の力の大きさである。そのような言い方は言葉としては月並みかも知れない。しかし、四高の歌がどのように伝播したか、また自治寮たる北溟寮において寮歌がいかに歌われ歌い継がれていったかを具体的に追えば、歌が元来、社会的存在である人間の根幹に位置するものであることが、改めて実感されてくるのではないか。歌は時代・社会・生活から生まれ、生活・社会・時代を作り、その過程で新しい人を育て、友情を育み、人を勇気づけ、生き抜かせるのである。北溟寮なき後、いかなる歌が時の潮に併するのであろうか。注目しなければならない。

注

(1) http://www.aoyama-dosokai.com　二〇一六年五月三〇日アクセス。

(2) 二〇一六年五月三〇日メール発送、同六月六及び九日メール回答受信。

(3) 二〇一六年八月一日付。

(4) 二〇一六年八月二七日。

(5) http://shorokenj.web.fc2.com/ouenka2.html　二〇一六年六月六日アクセス。

(6) 「新樹」第八号（羽咋高校情報委員会、一九五三年三月）所収。西田重治の長男邦浩氏よりコピー提供。邦浩氏によると、西田重治は金沢高等師範学校理科一類（数学専攻）を卒業後、数学教員として石川県能登地区の高浜中・羽咋高・高浜高教諭などを歴任、作曲も能くし、多くの学校応援歌を作曲した。二〇〇三年逝去。

(7) いずれも二〇一六年七月二五日、高屋氏からのメール転送。

(8) 「ウィキまとめ」(https://wikimatome.org/　二〇一六年九月二二日アクセス）の「どおくまん」の項など。

(9) この同窓会で披露された寮歌を録音された小原裕一氏の測定によると、「南下軍の歌」のテンポは七〇年代ＯＢではおおよそ六七ＢＰＭ、対して筆者ら八〇年代ＯＢではおおよそ三八ＢＰＭで、約五六・七％遅くなっていた。また「五誓寮逍遙歌」はおおよそ三五ＢＰＭで、八〇年代ＯＢでは寮歌全体が「五誓寮逍遙歌」のテンポに近づいていった感がある。

(10)「「嗚呼!!　花の応援団」劇画から映画へ」、「みずゑ」一九七六年一〇月号。
(11)「荻昌弘の映画劇場　嗚呼!!　花の応援団」、「サンデー毎日」一九七六年九月二六日号。
(12)「北國新聞」二〇一四年一二月二八日付。

謝辞

本稿執筆に当たっては多くの方々のご助力をいただいた。金沢大人文学類の一学生の方からは「南下軍の歌」の他校伝播についてご教示いただき、鈴木暁世金大准教授にはこれをご紹介いただいた。新潟高校青山同窓会事務局には上村光司氏への仲介の労を賜り、上村氏からはお手紙とお電話で懇切なご教示をいただいた。西田邦浩氏は貴重な資料をご提供くださり、引用に当たってもご助言いただいた。また塩谷憲司・和田健夫・小原裕一・山田篤・長島勉・高屋秀行の北溟ＯＢ各氏からは温かい激励のお言葉をいただいた上、貴重なご証言を賜った。特に塩谷氏からは大先輩として渾身のご指導と叱咤激励を賜り、高屋氏は広く北溟ＯＢに情報提供を呼びかけて下さり、和田氏から特に重要なご証言を賜り、小原氏からも鍵となる重要証言と様々なご指導、ご協力をいただいた。先の拙稿執筆時に提供いただいた鈴木利郎氏のご証言と資料には今回もお力をいただいた。また石川県在住の北溟ＯＢとして日頃よりお世話いただいている土田亮平、小池広人両氏には、本稿執筆に当たっても様々にご助言いただいた。以上の方々並びにこの他ご支援いただいた皆様に厚く御礼申し上げる。